



Title	能動的平和の達成 ~ 対話・連帯・協力による平和 ~
Author(s)	安井, 幸子
Citation	架橋, 13, pp.67-94; 2013
Issue Date	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/33736
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-22T02:28:18Z

能動的平和の達成へ対話・連帯・協力による平和へ

(Contribute Actively to Peace)

安井 幸子 (Sachiko Yasui)

1. がれきの中から救い出される
2. 島原へ逃れるも、立て続けに亡くなる親族
3. 発症—いじめ、学業の克服
4. ヘレン・ケラーから学んだこと
5. 対話・連帯・協力
6. 質疑応答

「講話者のプロフィール」

今回は、安井幸子さんの被爆体験と被爆後体験です。安井さんは、一九三八年十月十七日、長崎市目覚町で川南造船所に務める父・松尾寛秀さんと母・サヤノさんの長女として生まれました。一九四五年四月、錢座国民学校に入学し、八月九日には爆心地から九〇〇メートルの目覚町で被爆しました。このとき、二歳の弟が即死。二人の兄、叔父叔母を含め、一か月以内に家族親族二十三名を失いました。

被爆後、父の出身地島原に避難し、翌一九四六年三月まで過ごします。一九四六年四月、長崎市立香焼国民学校二年に編入。このころ、被爆の後遺症で頭髪が抜けてしまいます。また一年間のブランクのため授業についていけずいじめにあいました。必死の努力の末、二年修了時には表彰されるまでになりました。この体験は安井さんに生きる希望と自信を与えます。一九四八年四月、錢座小学校に転入し、一九五一年三月錢座小学校を卒業し、長崎女子商業女子中等部に進学します。一九五七年三月、女子商業高校卒業後、丸善に入社します。二十一歳のときに、原爆傷害調査委員会（ABCC）の検査で甲状腺がんが見つかり長崎原爆病院で手術を受けます。発声できるまで半年間の闘病生活を送りました。このとき心の支えとなったのが、一九四八年十月に長崎を訪問したヘレン・ケラーと父が尊敬していたマハトマ・ガンジーでした。その後、第一生命長崎支社の事務所長を経て、一九七三年から貸しビルを経営、現在に至ります。仕事の傍ら長崎平和推進協会継承部会に所属し、カナダのバンクーバーやアメリカのセント・ポールといった外国でも精力的に講演活動を行なっています。

タイトルは「能動的平和の達成」ということですが、被爆体験と被爆後体験をどう受け止め、発展させるかという非常に自覚的になって活動されている方だと思います。そういうことを念頭に置いてみてください。

講話

がれきの中から救い出される

安井 皆さんこんにちは。はじめてお目にかかります。これからおよそ八十分の時間をいただきまして、よろしくお願ひします。今日のわたしの話は、ただ単に過去の原爆被害を皆さんにお話しするわけではありません。でも、過去を知ることによって、いま、わたしたちがどういう状況の中で生活をしているのか。その答えは人それぞれ違うと思いますが、その現在の状況の中から、未来をどう見定めたいのだろうか、未来をどのような思いで生きていけばいいのかなどということを考えていただくためにお話しします。そのためにはどうしても昔の過去のわたしの悲劇とどうか、長崎の歴史の体験を含めてお話を聞いていただかなければ、いまがどうしても昔の過去のわたしの目標とするのは、皆さんの未来の安全のために、そして平和で健康で長生きができて、自分たちの思いが達成できる世の中であつて欲しいという願ひを込めて、わたしはこれからの時間を皆さんとともに考えながら過こしていきたくと思ひます。

アメリカにジョージ・サンタヤーナという哲学者がいます。彼がかつてこういう言葉を残しています。過去を記憶できないものは、その過去と同じような運命を負わされるだろう。でも単に過去を記憶していることに価値があるわけではない。その過去に起こったできごととなり、過去の思いをこれからさき人類のために、あるいは自分自身のためにもなるでしょう。どのように使つていくのか、つまり人類の未来を考えていくことが非常に重要である。ということとを彼は言い残してこの世を去つておられます。わたしはいつも思うんです。過去の先人たちの素晴らしい感覚とか行動とかそういうさまざま歴史を自分たちの心にとどめて明日を生きていけば、非常に絶望的な状況に置かれても

そこを乗り越える勇気がでてくるのではないか。そして自らの思いが発展的に繋げていけるようになるんじゃないかと。だから過去を知る、歴史を学ぶ、そして少しばかりわたしの体験に学んでいたければ皆さんの学習は百点満点につながっていくはずですよ。要は、あなた方に幸せを提供したい。わたしの苦しみの歴史からかち得たわたしの幸福感というものをあなた方に届けていただきたい、そう思ってお話をいたします。

長崎の原爆はおおよそ六歳のときに体験したわけですけども、その六歳の目が、あるいは心が、わたしの全身全霊を持つて長崎の歴史を捉えました。そして自分の友人や家族がみんな亡くなりました。その悲しみをわたしの目は捉え、そして耳で聞いてまいりました。そのことがわたしに原爆の悲劇とはどういうものかということをはっきりとわかって、六十数年の今日になってもその記憶は拭い去ることができない。悲劇的ではないんです。そのことを忘れないことが、いまになればわたしには素晴らしいことなんです。なぜか。皆さんが何か乗り越えなければならぬものに出会ったとき、人間の命の尊さに立ち返ることがあるでしょう。悲劇を知ることこそ、そういうものを学んでいくきっかけになると思います。

長崎の原爆は、それこそ絶望の淵に子どもも大人も含めて追いやりました。一瞬のできごとでした。わたしは壊れたあらゆる民家の瓦礫の土の底に生き埋めになりました。生きることとはもう絶望的でした。それは十万分の一秒という短かな時間に、ウランであるとか、あるいはプルトニウムという化学薬品が核爆発を起こすように仕組まれた爆弾でした。そのプルトニウムは長崎の場合は六キログラム、ウランの場合は、二十三キログラムだと言われています。しかし、長崎の上空でボックスカールから投下された原爆は、わずか一キロしか爆発しなかったそうです。形に変えてみれば、テニスボール一つ分ぐらいの大きさだと言われています。そのテニスボールに満たないかの大きさのプルトニウムが長崎の街を焼き尽くしました。人々の命を奪いました仕事を奪いました。健康を奪いました。自然を破壊しました。ありとあらゆるものが崩壊をし、わたしは一年生でどうとう学校へいけなくなりました。

地中に埋められたわたしは、叔父によって、あるいは母によって、土を掘り起こし手探りの中で命を救い込まれました。残りの四名の友達は、生き埋めになったまま強烈な爆風のせいで鼻の中、口の中に泥が吹きつけました。その吹きつける泥を追いやることもできない小さな子どもは体いっぱい砂や泥が詰まって即死していることを、外にいる大人は知る由もありません。

一人の女の子が叫んだんです、そのとき。お母さん助けて。押し潰されるような叫び声でした。わたしも助けを求めたかった。しかし口を開ければ泥砂がさらに入ってくる。わたしは口を閉じたままあつぷあつぷさせて一分でも命が長らえるように頑張っておりました。しかし、それにも限界があります。早く誰かが助けてくれなければ、わたしは生きることができない。そのときです。わたしの二本の足を、表の方にぎゅうつと引つ張り出す力が加わります。次の瞬間、おもいつきりその力は、わたしの二本の足を引き出しました。外に出ました。これが自分の娘だろうかと思っぐらいに、わたしの顔は倍に腫れ上がっていたそうです。爆風によるその爆圧で、わたしの体はものすこく押しつぶされ、その反動で大きく膨らんだ頭は表の方に引き出されて、徐々にその腫れが引いていったそうです。わたしは自分の街がこんなにも崩壊されて、想像もできないような状況の中で、なんにも言葉を出すことができませんでした。叔父が大きな声で叫びました。自分の友達がここにいたかどうか、おまえには返事ができないのか。わたしはなにも返事をする事ができなかった。母が横にいました。わたしの背中を叩きました。自分の友達がここにいたかどうかあなたも返事できないの？

背中をほんほん叩かれてわれに返りました。わたしは泣きながら大きくうなずきました。さる大人がそれを察知して、ここにどうもいるらしい、とりあえずここを掘ろうということで、雁爪（がんづめ）もスコップもなんにもない二人の大人は、手探りでその瓦礫を払いのけました。吹き上げる爆風によってさらにさらに押しつぶされる。容赦なく力いっぱいそれこそ叔父は一生懸命な思いで瓦礫をのけました。小さな足が見えました。母が叫ぶんです。おじさ

ん、小さな子どもの足が見えました。そうか、その子の足を引つ張れ。このままでこの子の足を引つ張ったら、骨が折れてしまいかもしれない。そんなことを言ったらどうするんだ、うしろはもう煙だ。火だ。急ぐんだ。そう言われて母は、無我夢中でその子どもの足を引つ張りました。中を覗くと二人目三人目四人目五人目と、子どもがいることがわかりました。その様子を見た叔父は、矢も盾もたまず、さあ急ぐんだ。瓦礫を払いどけないと、米軍がいつ攻めこんでくるかわからないぞ。そう言いながら、その瓦礫を払いのける。そして次々に子どもが無事に救出されます。目の前に並べられました。わたしはその様子を見てもなにも感じませんでした。おまえは、絶対に後ろを振り向いてはいけない。後ろはもう煙がきている。火がきているんだ。おれのあとをついて来い。そう言って叔父はわたしにけしかけるんです。わたしは無我夢中で母のうしろの洋服を握り締める。さあ急ぐんだ。そのとき、向こうから一人の母親が駆け込んでくるんです。大きな声で叫ぶ、うちのよしこはいたでしょうか。よしこちゃんはどこだ。あんたはこの子を抱いておれのあとをついてくるんだ。わたしは母の後ろを握り締める。そしてわんわん泣きながら叔父の後ろをついて行きました。叔父は上が十歳の、年齢の大きな方の子どもたちを脇に両方担ぎました。そして一人の子どもは、うちの母が抱えあげました。山へ山へ。いまの原爆資料館のある向かいの方に金比羅山があるんですけど、その中腹のところまでわたしたちは逃げることになりました。どこまでいけるかわからない。足元を見ると靴もなにもないんです。わたしはその素足で、わんわん泣きながら母の後ろを握りしめて、瓦礫の上を一所懸命、山手の方に逃げて行きました。

やっこのことで山の中腹にたどり着きました。その道中に怪我を負った人々が、たもとを引つ張るんです。お願いだから水をください。自分も飲めなければ、相手に水をやることもできない。振り切るようにして逃げていかなければ、他の家族を探ることができない。腰をかがめて、自分の住み慣れた長崎の街を眺めたときに、そこは自分の家もなく、すべてのものが崩壊をし、いたるところから炎が燃え上がっていました。わたしはなんにも考えることができ

なかった。呆然として自分の街の燃え尽きていくような様子を眺めている以外はありませんでした。そのとき二番目の十歳の兄が、息せき切ってわたしたちと巡り会えました。お友達とセミをとりに行っていました。その友達の首元に爆風で飛んできた瓦礫が突き刺さって、セミ取りの綱を持ったまま、その子はそこに行き倒れて即死したそうです。十歳の兄はそれを見て、気も転倒せんばかりに泣きながら家に戻っても家がない、両親もどうなったかわからない。山をさまよいながらわたしたちとやつのことで巡り会えたというわけです。

長男の十四歳の兄がいました。右肩に熱線の大やけどを負って、自力で逃げてきました。巡り会えました。夕暮れがきました。父が、山を超えて家族をやつとのことで探しました。見ると長男の肩はやけどで大変な状態でした。その様子を父は見えて、これでは山の中腹で今日の夜を過ぎすことはできないだろう。近くに国際墓地がある。避難場所を移そう。墓地は平坦だから体を横にすることができるとも思えない。そう言つて、わたしたちは周囲が真っ暗になるのを待ち構えるようにして、国際墓地の中に避難場所を移しました。暗闇の墓地の中にはすでに逃げこんできた人がいました。ある男の人が大きな声で叫ぶんです。苦しいからおれを殺してくれ。人間が生きようとするよりも死を願う人々の叫び、水を求める声は相変わらずです。わたしたちは横になることも許されないような状態で、墓地の片隅に身を寄せ合つて、家族はいました。

真夜中近くです。思い余つた母が父に相談しました。お父さん、幸子のあのお友達も山に寝せたまま、そして死んだ一番下の息子もここに置き去りにして、どうしてわたしたちだけこれから先逃げていけますか。何とかして近くの墓地に埋葬するだけでもできないかしらと必死に頼みました。それはよくわかる。だけど、今日、ここを動くことは生き残つた子どもをさらに危険に晒すことになる。もう一晩だけ様子をみよう。やむをえず、わたしたちは二晩目の夜をお墓の中で過ごしました。

そして二晩目の夜が来たとき、両親は山手の方に登つて行つてわたしの友達の亡骸を下の方に運んできました。そ

して弟と五人の小さな子どもは近くの墓地に運ばれました。お母さん急ぎなさい。急がないと、いつ米軍が大軍でくるかわからんぞ。そう言われても両親はなんにも道具がない。瓦が三角に尖ったようなものを拾ってきて、それを両親はそれぞれ二個ずつ持って、必死になつて墓を掘り出しました。さあ急ぐんだ急ぐんだ、そう言われて無我夢中で墓を掘る。やつとこのことで小さな墓穴が出来上がりました。そこに幼い子どもたちは、両手両足を曲げられて運び込まれていきます。一番最後に弟の遺体が運び込まれました。もう、いまできることはこれだけだ。急がないと時間が無いんだ。父は、両方から土をかぶせようと思いました。それを見た母が大きな声で止めました。お父さん待つてください。これじゃこの子たちがあまりにも哀れです。自分の洋服は汗と汚れてボロボロです。それを母は脱ぎとつて小さな子どもの顔の上に、せめて泥が直に被さらないように、そう言つて汚れた洋服をかぶせてあげました。そうして小さな五人の子どもは埋葬されたんです。近くに小さな石が転がつてた。それを目印にボンと置いて埋葬は終わりました。

島原へ逃れるも、立て続けに亡くなる親族

楽しくおしゃべりが弾み、土の団子を作りながら、草を刻んでままごとをして遊んでいた。幼いわたしを含め六名の子どもたちはあつという間に即死をし、そしていま土の中に埋められて、わたしの目には涙もなにも流れてこない。その死んだ友だちになんにも言葉をかけることができなかつた。いとこのお母さんが言いました。自分の亡くなつた娘の体を触つてわたしの母に訴えるんです。奥さん、この子の体はまだ熱いんです。何とか助けることはできないかしら。病院があるわけではない、医者がいるわけではない。母は自分の洋服の裾を歯で引き裂いてそれを自分の指に

纏わりつけました。そして口の中の泥を取ってあげて、そのあとに子どもは埋葬されました。助けることはできませんでした。国際墓地の中には生き残った兄や弟がいます。そこへ戻りました。

まんじりともしないで二人のそばにいたときに父は、誰のものかわからない衣服が爆風で引きちぎられて、そしてポロ切れのようになって点在している、それを拾い集めてきました。生き残ったわたしたちの足も中には靴がない。そのポロ切れを纏りつけました。焼け跡から電線を拾ってきて足首を結ぶんです。父は言いました。いいかこれが靴の代わりだ。このままでは長崎にいくことも危険だ。逃げていく先は島原半島だ。父の生まれた里があったところです。そこまで逃げていく。そこへ行けば空気が綺麗だろう、水も豊富にある。とにかくそこまで逃げていく。いまの爆心地からおよそ四・五キロほど北の方に歩いたところに次の駅がありました。そこまで歩かなければ救援列車に乗ることができないと聞いた。途中いかなることがあってもお父さんのあとを見失うな。そう言われてわたしたちはポロ切れを巻いた足を前に投げ出し、真夜中が来るのをじっと待ちました。

いよいよ真夜中がきました。出発のときです。一番上の兄はやけどがひどくて父に背負われました。わたしは母に手を引かれて、妹は母の背に背負われて、そして二番目の兄は、そのときはまた一人で歩きました。くれぐれもお父さんの言ったことを忘れないように。一步一步わたしたちは逃げる足取りを運び込みました。しばらく行くと、目の前に黒い大きなものにぶつかって、よく目を凝らしてみると、小さな子どもを抱きしめたような大人と子どももの黒焦げの死体でした。わたしの足はもう前にも後ろにも動かなくなりました。それに気づいたお父さんは大きな声で、なんということだ、あれほど真つすぐ向いて歩けとிட்டたろう。幼いわたしにそれ以上の恐怖を与えたくないという父の目一杯の叫びです。驚いた母はわたしを引き寄せました。さあ元氣を出して歩くんた。そう言われて、足を一步一步にやる。母から引つ張られて動いているようなものです。意識もなんにもない。わたしはその状態の中で歩き続けました。

しばらく行くと、牛や馬が目を丸々あげ、手足を硬直させた、半焦げ黒焦げの遺体のごろごろしていました。それを右に左に、あるいは跨ぎながら、踏みつけたかもしれない。その状態で歩き続けました。そのときの長崎の夜は、人々の生き埋めになったままの遺体に火がつき、焼け焦げた動物、あらゆるものが焼かれる異臭が長崎の街一帯に広がっていました。いまの大学の前あたりも瓦礫の状態で、その前をわたしはてくてくと歩いて四・五キロ、救援列車に乗りこみました。駅に着いても、そこはすでに生き延びた人たちの身動きできないような状態ではありませんでした。ただ水を求める声だけでした。やつとこのことで救援列車に乗り込み、四日間飲まず食わずの逃避行が続きました。四日目に島原の駅のホームにつきました。

まず容態が悪くなったのが二番目の兄です。お父さん、ぼくはもう歩けない。何を言うんだ。あの状態をここまでやつとの思いで来たんじゃないか。立つんだ。いやもう立てない。近くに親戚の叔父が住んでいました。駅に駆け込んできて、兄の頭に手を当ててみるともう四〇度もあるだろうかというほどの熱があったそうです。これで歩けというのは無理だ。小さな病院でもいい、田舎の病院に運ぼう。二番目の兄はすぐ病院に運び込まれました。一番上の兄と妹は、別の親戚に預けられ、わたしは両親と一緒に病院について行きました。一週間、日毎に兄の容態は悪くなっ て行きました。十日目を迎えた頃から髪の毛が抜け始めました。吐き気がひどくなりました。歯茎から出血がはじまりました。両親は思案しました。なんであんなに元気だったこの子がこういう状態になるんだろう。これが原爆のなせるわざとは当時の誰も知りません。そうしてただ枕元に座るだけ。子どもに慰めの言葉をかけるのが精一杯です。注射を打つてもらっても注射の液が散らばらない。飲み薬を与えても全部もどす。

その繰り返しの状態の中で八月二十四日、兄はどうとう元気を出すことができない。最期に目を大きくパチリと開けてわたしに叫びました。さようなら、あとを頼む。そう言つて十歳の兄はわたしに叫びました。お父さんは慌てました。お兄ちゃんの様子がおかしいから、急いで看護師さんにコップを借りて水を汲んでくるんだ。わたしは八月九

日の音と光の恐怖が全身に染み渡って、当時田舎の木造建ての、二階屋の電気もつけていないような暗い廊下を、一人で水を汲みに行くことができませんでした。でもお兄ちゃんに水は飲ませたい。その思いがあつても一人では水を汲みに行けない。なにをやっているんだ。ふたたび父にそう言われて、無我夢中でわたしは看護師さんからコップをもぎ取りました。走って行きました。島原は湧き水が綺麗なところですよ。病院のつきあたりに湧き水がある。その水をコップいっぱい汲んで慌てて走って戻って来ました。いっぱいの水はこぼれて半分以下に減ってました。それを兄に差し出しても、もうその水を口に運ぶことはできませんでした。そして最期に目一杯の叫び。さっちゃんさようなら。わたしにそう言いました。

わたしはただただ自分の拳を握りしめて、身を震わせて兄の死を悼みました。いつも喧嘩もした。でも仲のいい兄妹でした。兄はいつも負けてくれる。そんなお兄ちゃんの死を目の前でみて、わたしはただ拳を握りしめて涙を流すだけです。横に座っていた母が慌てます。お兄ちゃん、といま声をかけてあげてやんなさい。聞こえるか。声はだせません。胸の張り裂けるような悲しみは、わたしに最期の一言も出させることはありませんでした。母がわたしの拳を取り上げました。指を一本一本開いてくれて、開けたわたしの五本の指を兄の小さな手の上に重ねてくれました。そのときに感じた兄妹のぬくもりは、わたしに与えた絆の最も原型といえる状態でした。兄の手はまだ温かかった。でも言葉はかけてやれなかった。十歳の軍国時代の少年が六歳のわたしに残した目一杯の思いは命をかけた兄妹の絆でした。

わたしはそれから絆という一つの言葉にずっとずっとこだわりを持ちつつつけてきました。いろんな本に出会うたびに、いろんな大人の人に出会って言葉を聞くたびに、糸へんに半分の半と書く絆の持つ意味がわかってきました。糸の半分を君たちが持つて、残りの糸の半分为わたしを持つている。こんな短い一本の糸ではなんの役にもたない。しかし、この一本の短い糸、お互いに心を開いて、考えを巡らせて一本の長い糸に繋げたらどうなるんだ。何かきつ

と役にたつかも知れない。絆とは思いの深さとか愛情の深さだけではありません。短い糸が一本に掛けあうように、お互いに命を掛けあう、掛け合った思い、そのことが絆の語源では無いかとも言われた。そういう話を聞いたことがあります。まさにわたしはそれから兄の深い絆の思いを受けて、二番目の十歳の兄と別れました。

それから一週間、九月一日には一番上の兄が肩のやけどがどうすることもできない。お父さん見ると、紫色に腫れ上がっている。辛いだろう。辛いだろうけど頑張るんだ。これからお父さんが言うことをよく聞くんた。いいか、じつは八月十五日で戦争は終わったんだ。もう逃げることはない。おまえのその肩の傷を治し、もう一度生活をやりかえよう。やつていかなければならないんだ。すると十四歳の兄は、自分の肩の痛みを忘れたかのように目を輝かせて、お父さんを見上げました。薄い煎餅布団の上に寝せられた兄は、その痛みをそれ以上訴えることはなかった。お父さん、戦争が終わったって言うけど結果はどうだったんだ。結果は敗戦だ。父がそう言いました。するとその薄い煎餅布団の上をドンドンと叩いて、どうしてだよ、お父さん大人たちはみんな、日本は勝っている勝っていると叫びたじゃないか。だからぼくたちは欲しがりません、平和な日が来るまでは負けられません、そう言ってみんなで声を掛けあって頑張ってきたんだ。なのにどうして日本が戦争に負けたか説明してくれよ。説明ができるはずもない。

父の目には涙が浮かびました。思わずその涙が落ち、長男はその父を見上げて、お父さん泣いているのかい。どうして泣くんたよう。ぼくは日本が戦争に負けたなんて信じられない。だって家もなくなつたじゃないか。これからお母さんや妹を連れて、どこで、どのようにして生きていくつもりなんだ。僕の命は助からないんであれば、僕は日本の国のためにも、両親のためにも兄妹のためにも、特攻兵士になつたつもりで戦つてくる。だからお父さん泣かないでくれ。その涙を拭いてくれ。最後にお願ひがある。僕の好きなあの「海行かば」を歌つて僕を送つてくれないか。そう言われると、父はもう我慢ができない。涙がぼたぼたと落ちました。でも自分の息子が今際の際に痛みを訴えているにもかかわらず、なんの手当もしてやれない。せめてこの子の最後の願ひだけは聞いてあげたい。父は「海行か

ば」という軍歌を歌いました。海行かば 水漬(みづ)く屍(かばね)、山行かば 草生(くさむ)す屍。

歌い終わって、もう一小節二小節歌うかとしたとき、父の声がとまりました。長男は目を閉じました。息途絶えしました。多くの兵士が戦争に駆り立てられて、海で戦うものは、海行かば水漬く屍。海の水の上にぶかぶかとその遺体は水に浮かび、誰もその死んだ屍を拾うものなし。誰もその遺体に拾い上げて声を掛ける人もない。遠いふるさとを思い、兵士たちはどんな気持ちで死んだのだろう。多くを語らなかつた父が、いつもそういう思いでいた息子の死に感じた胸の痛みがわたしにはうかがえます。

それから一日おいて九月四日が来ました。わたしを助けてくれた命の恩人の叔父が、喉に千本の針を刺したような痛みだと訴えながら亡くなりました。わたしはその叔父の養女になる予定があつたそうです。わたしの親になるべき人であつたということを後で聞きました。叔父の亡くなつた翌々日、わたしは駆け込んで見舞いに行きました。その妻も腰下半分に熱線の大やけどを負つていて、苦しみの末に小さな布団の上に横たわり、枕元には自分の夫の遺体が寝せられていました。農家の人の脱ぎ捨てた藁草履を引つ掛けて、おばちゃんと言つと、うつすらと目をあけた叔母はわたしの顔を見ました。ああ、さっちゃんかい。すると叔母は、一度でもよかつたねえ、あの美味しいさつまいもを釜いっぱい蒸かして、みんなでおしゃべりしながら笑いながら、お腹いっぱい食べたり食べさせたりしたいものだった。そう言つて、次に何を言うのかなあとわたしは黙つて顔を見ていました。叔母の目はふたたび開くことはありませんでした。その思いを言葉に残しながら叔母も亡くなりました。

八月九日に原爆が投下され、ひと月足らずのうちわたしは兄妹をはじめ親族合わせて二十三名の命が奪われてしまいました。その内の二名は行方不明となつて、誰に問い合わせてもどこを歩いても、二人の遺体を探すことはできないまま六十六年の歳月は過ぎ去りました。

発症—いじめ、学業の克服

わたしの体はまず重い貧血に侵されました。放射能の後遺症は髪の毛を抜け落とさせました。そして体は虚脱感におそわれ、そこにものがあつても、手を出して取る気力が生まれてこない。立ち上がって自分の顔を洗いに行く体力が持たない。放射能の後遺症のまず最たるものは、この虚脱感から始まります。早い人は原爆投下の荒れ果てた大地の上に身が倒れたときから、起き上がるのが困難になったという人もいるそうです。わたしは島原までやつこのことで逃げ延びることができました。でもその後、わたしの体はどんどん弱って行きました。食べ物はいつさい受け付けなくなりました。ものを思うこともなくなりました。被爆後のわたしの体験がここからはじまりました。この子ども最後はだめになるのかなあと両親は思ったそうです。

父が一番大切にしていた金時計がありました。その金時計を、腕時計を父はいつも離さないようにはめていました。この子に口に入るものがあればと思い、田舎中を探し当てました。お金が無いから、この時計と何かを交換してもらえないか人間の温かみと親切に触れたのも島原でした。ある一軒の農家に上がり、子どもが食欲が生まれぬ、ものがない。元来うどんが好きの子でした。干しうどんを一輪でもわけてもらえないだろうか、この時計と引換に。父はその腕時計を渡しました。農家のおばあちゃん、それは気の毒にと言つて、うどんの束を二束、父に渡してくれました。それを大切に、今度は雲仙の裏山にはきのこがとれました。そのきのこをダシにとつて母が素晴らしい美味しいうどんを炊いてくれました。そのうどんがわたしの命綱になりました。そのとき始めて被爆後、わたしがものを口にした瞬間でした。これがきつかけで、ものが食べられるようになってきた。山の空気をいっぱい吸つて駆け巡つて、元気を取り戻さなければいけない。

親戚のお宅の隠居部屋の一部屋空いたところを避難場所にもりました。その小さな隠居部屋には古い箆笥が一つ

だけ置いてありました。箆笥の上には、亡くなつていった兄と叔母と叔父の白い骨箱が三つ並べてありました。わたしはおばちゃんにも会いたい。お兄ちゃんにも会いたい。両親が家をあけたときに、箆笥の引き出しの上に乗つて、その骨箱の蓋を開けてみた。人間死ねばこんな状態になるのか。わたしが人の骨を、自分の身内の骨を目の前で見たのは、そのときがはじめてでした。たいへん叱られました。こんなに馬鹿げたことをするものではない。でも、そこには兄の姿はありません。そうして島原の雲仙の裏山での避難生活が始まりました。

冬がきました。一枚の毛布を譲ってもらいました。その毛布に妹と二人で身をくるんで、その年の冬をしのぎました。高野豆腐、いまで言う凍り豆腐、これがつくられるのも、ちょうど寒のひどいその時期です。田舎の人は勤勉にも、夜の二時か三時ごろ、大豆を挽いて豆腐をたきます。そしてその豆腐を、雲仙普賢岳の吹き降ろしの寒風にさらすことによつて、凍り豆腐が出来上がります。避難してきてあらゆる迷惑をかけている。また、自分の元氣を取り戻すためにも、凍り豆腐づくりを手伝つたらどうかと言われてわたしは、夜の二時か三時、ガタガタ震えながら凍り豆腐の作り方と外の寒にさらすその手伝いをして、凍り豆腐は馴染みの食材となりました。おいしい蛋白の栄養源であることを知つたのもそのときでした。そうしてわたしの体は一見良くなりつつありました。しかし、なかなか元のようになつたしにはなりませんでした。

翌年の春がきました。わたしが学校へ行つていないので、父が慌てました。なんとしても幸子を学校へ復帰させなければいけない。長崎へ戻らなければならぬ。家のないところどうしますか、母がそう言つても、わたしの学校の問題を片付けるためにはどうしても長崎に戻りたい、そう言つて父は長崎へみんなを連れ戻しました。焼け野原に掘つ立て小屋を立てました。手先の器用だつた父は自分で掘つ立て小屋を作り上げました。寒いとき、下の地面を掘つてこたつを作る。隣近所にはなにもそういうものを持つたところはなかった。夜になると近所のおじさんおばさんが集まつてきます。火にあたりに来るんです。そして戦争のときの話、これからの日本はどうなるんだらうという話

をやるんです。わたしはただ聞き役でした。

朝起きて着の身着のままのわたしは、それこそ学校へ運ばれ校長室に運ばれました。一年生を終業していない児童は、もう一度二年をやってください。校長先生はわたしの姿を頭の前から足の先まで眺め、なんとひどい。そう言われました。わたしは二年生から行きたいんです。そう言いました。それは無理だ。一年を終業していない児童はもう一度二年をいかなければいけない。いろはのいの字も書けなかったわたしが、そして自分の名前も書けなかったわたしが二年生にいけるはずがない。そのことはよくわかっていました。けれども兄が最後にあとを頼むといった一言が、わたしをどうしても二年生に進ませました。校長先生はどうしても頭を振りません。わたしは泣きの談判に入りました。とうとう二年生の新しい教科書を与えてもらいました。そんなに言うんであれば仕方がない。進級することはできません。だけでも、ついて行けなければ一年に戻します。そう言って約束をかわして、二年生に行ったのはいいんです。しかし、まったく理解ができませんでした。

今日のような天気の良い日には、小屋の前で母が直立不動で待つていました。そしてムチを持っていました。石の上を叩く、さあ今日はどこまで進みましたか。教科書を出さない。開いてみると教科書はなんにも書いていない。印だけでもつけてこいといったでしょう。その印がつけられない。その教科書を取り上げて、今度は母が学校へ駆け込むんです。担任の先生に相談をする。もう幸子さんはずいぶん体も弱っている。これ以上もう二年生は無理です。一年に戻しましょう。二人の話はまとまっても、わたしが言うことを聞かない。家に帰って母がわたしにこんこんと説教をします。だけどわたしは、頑張るから、それを言わないで。口いっばいのことばかりを言ってもおまえの成果は上がらない。これではだめだ。そして翌日、またしづぶ学校へ出す。

そこには待つていたかのように、クラス全部の子どもがわたしを取り囲む。差別と偏見の構造がそこにはありまして。女のくせに髪の毛はない。首筋には垢をくっつけて、着替える洋服も毎日おんなじものばかり。自分の名前も

書けていないじゃないか。それじゃもう学校へ行つても同じじゃないか。おまえは掃除だけして帰れ。そう言われました。わたしは掃除だけはできるから掃除だけしてた。でも体がふらつき、汲んできたバケツの水は途中でこぼす。教室中水浸し。その後も拭きとって、掃除だけの毎日でした。子どもたちはわたしの持っていた粗末な弁当まで取り上げて、昼食べます。でも、いま考えると止むを得ないかな。食糧はまったくない、誰が取って食べたのかわからないけれども、弁当はなくなっていました。

母は毎日のようにわたしに特訓をしました。あるとき一つの問題がとけた。こんなことがわからなかったのかと自分でも喜びとともに驚きます。夏休みがきました。宿題がきました。自分で調べて答えを出すことが楽しくなりました。そして二学期が始まりました。ガキ大将の坊主たちが宿題を忘れている。それを手伝ってやることもできるようになりました。教室の雰囲気が変わりました。苦しいこと、つらいことがあったら作文を書きなさいと母に言われました。わたしは作文を書くのが一番苦手でした。でも自分の悔しさを書くのはある程度簡単かなあと思ってたんです。でもなかなかペンがもてませんでした。紙をかうお金もないし、鉛筆を贅沢に使う道具もなんにもない。ただわたしは、めいっぱい学校の勉強をするだけでした。

そして翌年の春の終業式の日、あんなに言った校長先生がわたしに一枚の学業優良証を渡してくれました。担任の先生が一番喜んでくれました。ぐるぐると巻いてそれをわたしに渡して、急いでお母さんに持って帰って見せなさい。わたしは天にも昇るような喜び。その賞状をもって家に戻りました。掘っ立て小屋です。その掘っ立て小屋の中に小さな箱が二つひっくり返しておいてありました。その上に、右の端に叔父の遺骨、真ん中にお兄ちゃんの遺骨、左端に叔母の遺骨の、三体の遺骨が置いてありました。母は燃え残りの小さなろうそくを灯して、わたしの持ち帰った小さな賞状に目をやると、涙を流しながらも、うつすらと笑っているんです。兄の遺骨の前に立てかけました。お兄ちゃん褒めてやんなさい。あの幸子がここまで頑張ったよ。そう言いながら母は涙を止めることができず泣

き、後ろに立つてその様子を見ていたわたしに気づいた母は、大きく手を開いてわたしを寄せました。よく頑張った、今日のこの気持をあなたは一生忘れないで頑張つてほしい。お父さんもお母さんも体がずいぶん弱つてきた。いつまであなたとここで一緒に暮らしていけるかわからない。たとえ親に万が一のことがあつたつて、それでも学校に行きなさい。わからないことがあつたら先生に相談すればいい。

横にいた父が言いました。お母さんの言うとおりだ。お父さんだつてずいぶん体が弱つてきた。親としておまえになんにも残してやることができなかつたかもしれない。しかし、これから言うお父さんの言葉はたった一つ残す財産かもしれない。戦争にあつたから、原爆にあつたからわたしは、こんなに惨めで、こんなに苦しい思いをしなければならぬというような、愚痴を吐いた人生ではあつてはならない。相手を憎むようなことはあつてはならない。それをおまえが口にするときには、平和というものは訪れてこないんだ。相手を罵り恨めば恨まれた相手は必ず仕返しをするだろう。その中には平和というものは無いんだ。自分の兄妹も縁者も、どのような姿で死んでいったかということ、よもや忘れはしないだろう。平和は、人を恨んでは訪れないということ、心を留めておくべきだ。これがお父さんがおまえに渡せる唯一の言葉の財産だ。そう言いました。

その父が肝臓がんで亡くなりました。一杯の芋飯を、自分は食べたふりをしてわたしに与えてくれた母も、骨髄性白血病という重度の障害を受けて亡くなりました。一人生き残つた妹も白血病で亡くなりました。これで原爆を受けた家族は全部崩壊しました。わたし一人が生き残りとなりました。これからわたしの行く手、それこそ様々なできごとと苦難の歴史が重なりました。

この話のあと、皆さん、これから生きていくあなた方に、何か一つでもお役に立てる話に繋げることがあればという展開にさせてもらいます。原爆の脅威は、わたしにまず何をもちたか。サバイバルで生きなければいけないということ、なにかもなくなつた状況の中で生きること、ただ生きることのみを思い、何がこのような大きな被

害をもたらしたかのような。そういう説明もなにも受けない。未知の世界への挑戦です。今日は元気かなとおもったら、明日はもうご飯が食べられない。朝は元気かなあとと思ったら、夕方は体の具合が悪くなる。そういう未知なる世界との闘いでした。学校へも行かなければいけない。親の言い残した気持ちも受け継がなければいけない。わたしのサバイバルは、なんにもないやぶれかぶれの状態の中から、お金が一銭もない状況の中から、健康も破壊されて、そして進みました。

一九四五年からおよそ十年間。これはなんにもわからない状況の十年間。戦争がなんなのか、なんで核兵器なのか、原爆がなんだだったのか、そういうことは暗黙のうちでした。だから健康を取り戻した十年間にはわたしにもありません。なんにも心配がありませんでした。ただ一生懸命学校へ行つて勉強をして。中等部に入った頃からは、わたしは奨学資金が受けられるようになりました。それで学校へ行くことができ、心配がなかった。何がいま、あなたにとって一番の自信ですか？ と聞かれると、健康ですと。健康であることがこんなにも素晴らしい。ですから、山登りも行く、海水浴も行く、なんにも心配はなかった。それが長崎の復興とともに地域の差別や偏見が訪れ、診断に行つても治療が受けられない。真相が明らかではない。その結果は全部アメリカに送られていたということを後になって聞きました。

ヘレン・ケラーから学んだこと

わたしが二十一歳になったころ、健康診断に行つたときに一人の医師に出会いました。その先生の手に触れたのが甲状腺のがんでした。いまで言うセシウム。それは喉に集まるそうです。そして十歳以下の子どもときの被害は、

おびただしくそれが表に現れやすいということだそうです。いま福島で取りざたされているセシウムの問題です。わたしは喉に見事に発生しました。先生の勧めを受けて手術をしました。一日でも早いほうがいい。原爆病院に入院をしました。手術をしてみると、たいへん悪性のがんであることがわかりました。糸をとる一週間前になったとき、担当の医師が申し訳なきような顔をしてわたしに言いました。もう一度先生と一緒にがんばろうよ。もう一回手術をしてくれ。わたしは、どうしてですか。糸をとる段階だが、中身がよろしくなかったから、もう一度やり直すんだと言われました。わたしは自分でどうすることもできないから、二回目の手術をうけることにいたしました。その二回目の手術はわたしには大変な苦痛でした。もちろん麻酔をしていて、そのときはわからない。だけでもその後、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普通であれば、傷もある程度楽になつて声が出る。その声がかたくなくない。ウンでもスンでもいい、返事をしてくれと先生が言われました。しかし、その声が出せない。わたしは落ち込みました。原爆被害の後の、二回目の絶望のときがきました。あんなに一生懸命頑張つて、そしていままた声が出せない。

わたしはどうすることも出来なかつた。でもわたしが小学六年になりかけたころ、長崎にヘレン・ケラーがお見えになりました。そのヘレン・ケラーにあつた日のことを思い出しました。彼女は目も口も耳も不自由な三重苦を持つた人でした。その彼女が駅前あたりの広場に立たれて、そして自分のそばの人に手話を通してあの美しい長崎の街が一日でも早く蘇るように、そういうメッセージをされました。口の大きな洒落た帽子をかぶつて、ヘレン・ケラーはとても綺麗な人でした。わたしはボロをまとい、しかしもう六年生で、健康には自信がありました。ヘレン・ケラーの姿をじっと見て、すごいなあ、わたしもこういう人になりたいなあ。自分が三つの苦しみを持ちながらも、世界の多くの人に平和を訴える、素晴らしいことだとわたしは感じました。その日のことをわたしは、原爆病院で、自分ががんになったときに思い出しました。声が出せない。しかしわたしは耳は聞こえる、目も見える。もう一度だけがんばろう。そして担当の医師、看護師さんの指示にしたがつて、一生懸命声をだす練習をしました。やつとのことです

が出せるようになりました。ですから今日、皆さんにこうしてお話することができます。そのとき、わたしは人間の持つ言葉の大切さを身を持って感じました。

たった一言で、人は友達にも勇気を与えることができる。たった一言で友情という愛の輪が広がるかもしれない。落ち込んだ友達に、一言の言葉は勇気を与えるかもしれない。一緒にがんばろうよというだけで、お互いが元気になるかもしれない。一言の言葉の持つ意味をわたしはものすごく感じました。せつかく声が出せるようになったわたしは、ならばできることは、もし自分の胸に心に、病める思いを持った若者がいるのであれば子どもがいるのであれば、絶望なんて無いよ、君が君の思いを達成しようと思う心があれば、それは完璧に成就できるんじゃないかという言葉をかけてやりたいなあ、わたしはそういう思いで自分の言葉を有効に使いたいと思う。それが原爆の話を平和のために、有効に使えるきっかけになれば、と思うきっかけになりました。自分の目の前で多くの人が次々に死んでいく。そのときに人間の命は限られているんだなあ、永遠にあるものではないんだなあ、ということをかすかに子ども胸の中に感じました。それから年を重ねて、その日のことを蘇って思い出したときに、その数多くの死に接したとき、なんと与えられた命の尊いことかと考えました。そのことを考えたときに、たとえ苦しみがあるからといって若者よなぜそんなに君たちは死を急ぐんだ。とわたしは言っているんです。小さな子どもが虐待を受けて殺される。なぜそんなことをするんだ。命の尊厳をなんと心得るか。そのためにわたしは長崎の過去の歴史を皆さんにどうか知ってほしい。学びとっていただきたい。そしてあなたにお子ができて、小さな家庭ができたときに、味噌汁一杯を交えて親と子が平和の世の中に、平和とはなんなのかを語って欲しい。そういう親子を作っていたら、これがいまの世の中を改革する唯一の方法なんです。それは大学生の皆さんにお願いするより他はありません。

一生懸命に生きた命。わたしの命もあとどれくらいこの世で与えてもらえるでしょうか。そう思うと若い皆さんに後を継承をお願いするより他に無いんです。この話は楽しい話ではない、逃げたいくらいのお話です。わたしが皆さん

と同じような若い年齢だったら聞きたくない話かもしれない。しかし避けて通れない。いまこの地球がどういう状態なのかということ、みんな考えておかなければいけない。人間として生きていくために最低基準のものがなければ人間は生きられません。これがベーシックヒューマニズムという最低限のものです。食糧にしても、水にしても、家にしても、医療にしても、すべて最低限、贅沢は言いませんということですね。それがあつての今日のわれわれなんです。それを原爆は全部、一瞬にして奪い取りました。

東北で地震が起きました。原発が大きな事故を起こしました。家どころか、医療どころか、田地田畑全部、日本列島の半分を持って行かれたような衝撃を受けました。「米は命」と国際コメ年で、そう取り上げられています。その米が半分、取れなくなつた。そして食糧危機が訪れたら、日本の自給率はそれこそお粗末なものです。そういうことを考えたとき、この地球上には、核も存在している。原発の危機に誰も手を出せない。そして、原発そのものに手も足も出せるような状態ではありません。小さいときから核と向き合つて生きてきたわたしは、その状況から逃げなかつた。

あなた方の命を、あなた方の平和をこれ以上崩されたらたまりません。福島であつたこと、東北で起こつたことは他人事ではないんです。どこであつても不思議もない。ここにギリシャ神話が登場します。ダモクレスの神話という神話です。ご存じでしょうか。これは記憶にとどめてください。いかなるときでもお役に立ちます。対岸の火事では済みませんよという、それこそ繁栄を脅かす。ダモクレスの言葉です。

王の玉座に座つた王様に対してダモクレスは羨ましいと思ひました。人の上に長として立てば、こんなにいい酒が飲めて、いいご飯が食べられていいなあ。それを見てとつた王は、ダモクレスを王座に座らせました。一国の責任者はおまえが言うほど楽なものではない、ということをも身を持って説きました。ダモクレスは、今日も美辞麗句に囲まれる王と同じ待遇が受けられるか思つた。玉座の上の自分の頭上にふつと目をやってみる。ピカピカの劍が髪の毛一

本の細い糸に吊るされて、自分の頭の真上にあつた。ちよつと油断をして何かのはずみに、いつ切れるかわからない。自分はズサツとやられるわけです。その繁栄を羨むだけではだめだ。繁栄の裏には何かがあるか。そのことを考えさせるダモクレスの剣は、わたしたちが生きていく上で絶対に忘れてはならない。

日本のように土壌が緩やかで、そして地震帯が走っている。豆腐の上の列島と呼んだ人もいるくらいです。その豆腐列島の上に原発が五十四基もある。問題がいくつもいくつも新聞テレビで報道される。なにを知っているのか知ってないのか。わたしたちの命をどう思ってくれるんだと言いたいぐらいの、ずさんな安全神話。安全の神話だけ、崩壊の歴史もまたあつたんです。過去のできごとをわたしたちは忘れてはいけない。

対話・連帯・協力

平和を考えるとときに、わたしたちは世の中平和だからいいなあ、もう戦争でもないんだから、過去の六十年も昔の話は聞かないでいいわと思うかもしれない。わたしも若いときはそうであつたかもしれない。しかし、前を知らないで未来は見連せない。そのためには何かが必要か。対話と連帯と協力があつてこそ、戦争や暴力のない世界が開かれるものだ。わたしは、自分の幼いときの二つの目が捉えた戦争の悲劇の中からそれを感じます。対話は人とお話をすること。しかしながら、その対話をするには、対話をする態度が問題です。相手を高いところから見下ろすような感じで、軽蔑の眼差しをもって人を見つめてはいないだろうか。相手と肩を並べて話し合いの姿勢を持っている愛情を持っていろいろか。それが連帯という、差別のないみんな含めてという連帯の言葉に表される。協力は愛情の極限です。対話、連帯、協力、この三つがすべての平和の根源をつくるということを、大学生の皆さんであれば十分に想

像ができるお話だと思われれます。そして、その対話の精神は、素晴らしい対話の構築をしていきます。

それが、具体的になぜ必要なのか。いまはグローバルな世界です。グローバルの世界は下手するといいいことも悪いこともあります。全部グローバルに世界中に広まってしまおう。そうであれば、わたしたちは素晴らしい心の精神を磨きながら、そのグローバルな世界の中に平和の発信をしていくことの心、これは大切ではないかとわたしはいつも思うっています。シモーヌ・ヴェイユ。フランスのある哲学者はこう言いました。相手の心の痛みの中に自分の心を置くことができる。そして、その痛みを我が事のように思い、自分の心が傷んでいけば、難なく国境を超えることができますよ。戦争で子どもを亡くす。ひもじさゆえに、飢餓ゆえに命を落とした哀れな子ども。すべてのそういう悲劇の中で生活をしていく。子どもを思わない親は一人もいない。そこには国境は無いということです。そして、子どもが親を慕う、そこに宗教の違いもない。このことを、わたしたちは忘れて海外に出向くものではありません。そのことを知って海外に赴けば、必ず長崎の若い青年の発信は届くはずであります。これから、どこでどのように羽ばたき、皆さんは生活を続けて行かれるかわからない。そのときの注意点として、このことは良く心にとどめて置かれたらいいかなあと思います。

対話の精神をもつて、そして相手の苦しみの中に自分の心を重ねてみて、理解しうる目一杯の中で思う心、痛める心があれば、洋の東西を問わず歴史は繋がります。そのことがわからずに自分のことばかりをまくしたて、それで相手を説得しようと思つても誰もついてこないだろう。ましてや国際社会では難しい問題が今後も山積みになると思います。わたしたちのこの地球も核は依然として堂々と存在をし、そして原発の事故も終息なんてことはわたしにはわかりません。原爆の放射能の被害をもろに受けたわたしは、手も足も出せないんじゃないかなあという恐怖すらあります。しかし、そういうことを考えてみたとき、何一つとして、目を逸らして考えずに済むような世の中ではないということがわかります。どうか前向きに、真正面から捉えてそれに立ちほだかつてもらいたい。

放射線といえは、シーベルトの名前が非常に新聞紙上に出ています。シーベルトというのは放射線の被害の数字を表す単位だと思っている人が非常に多いんです。しかし、シーベルトは人の名前なんです。身長一九〇、体重は一五〇キロ。堂々とした風格の持ち主だったそうです。ストックホルムの奥地の方に、湖がいくつもあるような、甲子園球場二六〇個分ぐらいの森の中にシーベルトの一軒の家がある。大邸宅を構えている。シーベルトの父親は電線事業で大富豪になられた。そのためにシーベルトは若いときに父親の跡をついで、会社のトップに立たれた。しかしたちまち経営上は赤字を出した。自分はどういう仕事は向かないなどということ、放射線の研究、防護の研究に邁進したそうです。そのシーベルトはとてつもなく放射線の防護に対しては、誰よりも誰よりも熱心で、彼は最後の最後まで、放射線には敬意を持って当たるようにということを言い続けて、わたしたちに教えてくれた人なんです。

放射線の脅威に携わったキュリー夫人にしても、いまでいうベクレルにして全部ずさんな扱いをして、そして歳若くして放射線の障害で亡くなったという歴史も残っています。その放射線の怖さはX線を発見したレントゲンの歴史にもあります。彼はレントゲンの博士としてそれこそ発見者の一人として活躍をされました。わたしたちもその恩恵を何かの病気をしたときとか、必ず受けます。その放射線の研究に予断が無かったX線を発見したレントゲン、その愛弟子の一人が、あまりの熱心な働きのために、手の指が変形をするほど放射線に侵されたそうです。これがほとんどの人が知っていない放射線の、それこそ被害者の第一号ではないかといわれているそうです。わたしも本を読んで知りました。驚きました。そういう歴史の中にわたしたちはいま生きています。そういうことを考えたとき、これから先のわたしたちは、決して他人事ではないタモクレスの剣を心に秘めながら、油断なく皆さん雄々しく生き抜いて欲しい。わたしは生かされました。キング牧師とマハトマ・ガンジーの考え方と行動によって、わたしは絶対的な希望を捨ててはいけな、そして勇気を持たなければいけない。その他に人間愛を携わなければなにも育たない、ということを知りました。これが生きることの支えとなりました。

誰も記憶している人がいなくらいに日本も変わって来ました。しかしこれまでの日本とこれからの日本は少し状況が変わる可能性もあるんじゃないかと思えます。わたしはこれからしっかりと未来を展望し、どのように生きていけばいいかということを探索してみたいと思えます。もう時間が来てしまいました。皆さん、非常に熱心にお話を聞いていただき、こんな話でよかつたかなあとわたしは思います。しかし、わたしが皆さんの将来のご無事と発展を願う気持ちに何一つ変わりはありません。

どうか自分が今日あるのは、なにがしかの神の恩恵があつてのものだという深い感謝を心の中に決めて残された学業に勤しんでもらいたい。なにもかも取り払われた原爆の被害者が、その思いを胸に立ち上がりました。そして石の上で、墓の石碑の上でわたしは勉強をしました。家には机もなんにもない。その墓石が坂本の国際墓地の横に連なっています。その上で遊びましたし勉強もしました。浮浪児がいっぱいいます。浮浪児を集めて青空の塾も開きます。勉強するよりほかにいんです。点取り虫ではないんです。なぜか。なにもかもなくなったわたしは、一つでも多くの知恵を受け継がなければ、生きる道は無いんです。仕事につけないんです。そのことが、原爆が、わたしに非常な苦しみを与え悲しみを与えたけれども、わたしにはまた、両親が生きる勇氣を残してくれました。これしきのことです。負けてたまるかという思いは、あなた方の将来に夢や希望をもたらすことと思えます。希望の絶対的根源の理由は、いかにして生き延びるかということなんです。それが希望というものの根源的な理論なんです。いかにして生き延びるか。わたしはこれは非常に大切なことだと思えます。わたしは勉強をさせてもらった。多くの素晴らしい先人に巡りあえて、その人の残した本を読ませていただいて。皆さんの前に立たせてもらうだけの、ぎりぎりの健康を与えてもらって、今日のわたしがあります。感謝の一言です。これで時間です。皆さんありがとうございます。

質疑応答

——朝日新聞の連載の中に、バンクーバーでカナディアンインディアンの人たちと交流したというお話がありましたけど、アメリカでもカナダでも、インディアンの方がウラン鉱山の放射線で被爆している人が結構多いんですが、そのときの交流の中でそういう人たちはおられたんでしょうか？

安井 すばらしい質問をいただきました。わたしは戦後五十周年のときにカナダのバンクーバーへ世界の平和大会に出かけてまいりました。そのときにバンクーバーで向こうの先住民の方とお会いをして、彼らのスコームिटツシユネーシヨンという特別な区域の中で、先住民の人と一緒に手をとりあって、足を大地を踏みしめるようにして先住民の人と一緒に踊りました。そのときにご質問にありましたようなお話は出なかつたんです。

しかし第二次大戦にほとんどの人がかりだされて、戦争が終わつたらもうお前たちはいらないからと、山へ追われたそうです。最大の民族の差別を受けた。その民族差別の中に生きたカナダの先住民との出会いでした。そこに取り組む、手を取り合う状況の中に平和意識が生まれました。わたしを迎えるためにインディアンはとも手先が器用です。音楽を作ってくれました。そして幸子のための音楽といって、バンバンバンバン、ギターを弾いてわたしを迎えてくれました。彼らはとてつもなく、そばでみると大柄な人。腰の下まで髪の毛を三つに結つて、それに前に太鼓を持って大地を駆け歩く。その迫力に押されました。しかし、その彼らがとても厳しい目を持っている。真実があるかないかを見定める。そして、この人の言っていることは真実だ。本当にこの人は苦しみから逃れたんだ、自分たちの気持ちをわかつてくれたんだということを彼らが認めたとき、一緒にダンスができたんです。これはわたしにとつてとても感動的でした。

その内の一人のチーフが言いました。聞けば長崎は原爆で大変な被害を受けたことは知っている。なのに、なぜあなたは先住民の苦しみをこれほどまでに訴えるのか。わかってくれるのか。とても自分たちにはありがたいし、なぜだろうという質問は当然残ります。ともに、苦しみを味わった人間として、手を結べないことはないでしょう。彼らは感動しました。わたしをそばに呼び、胸につけたバッチを、メンバーのバッチをわたしに渡すんです。記念に持って帰ってくれ。そしてわたしは、彼らの持っていた万年筆からバッチから全部、手のひらいっぱいいただきました。そして、歌とともにかみしめて、抱き合って泣き、励まし合いました。わたしの百年間のもし人生があるとすれば、その半分ですが、五十年間のうちの最高の感激でした。それがカナダインディアンとの出会いでした。

〔追記〕 なお、本稿は2011年12月1日に行われた平和講座の講話内容をテキストに起こしたものである。